

(第3種郵便物認可)

# 老舗のチカラ

## 山田工業

富山市婦中町萩島

とやま経済

会社名 故・山田久松氏が1938年、山田鉄工所を創業。67年に株式会社化し、名称を山田工業とした。現在は婦中鉄工業団地内の本社・工場のほか、日産化学富山工場(富山市婦中町笹倉)内の婦中工場がある。売上高は15億円(2019年1月期)。従業員は63人。



プラント建設中の現場  
=1960年代、兵庫県内

# 高い技術で機器製造

6月上旬、婦中鉄工業団地(富山市婦中町萩島)にある山田工業の本社・工場に入ると、製造途中のいくつかのタンクが並んでいた。「最近は大火力発電の高経年化対応や低炭素化のための設備更新を手掛けることが多い。運転停止中の原子力発電所が多く、火力関連の需要が高まっているようだ」と山田恵子社長(46)は話す。

さまざまなタイプの機器を作ることでできている。前身の山田鉄工所の創業は1938(昭和13)年8月。山田社長は祖父に当たる故・久松氏が、婦中にある日産化学のメンテナンスを担ったのが始まりだ。65(同40)年には富山市牛島エリアに本社を

移し、圧力容器やクレーン、鉄骨などの製造を手掛けるようになった。73年(同48)に神通川沿いに鉄工業団地ができたのに合わせて婦中に戻った。70年代には全国の機械・化学メーカーなどに技術を提供し、新規開拓した東洋エンジニアリング(千葉県習志野市)からの受注で、横濱、全国各地の上下水処理場や

エレンガス製造プラントの設備を教多く手掛け、海外向けに輸出した。円安で輸出競争力があつたことから、事業を拡大した。ただ、80年代後半からは円高で競争力が低下する。パルプ廃棄もあつて厳しい環境に置かれたが、安定した公共事業への進出を模索、全国各地の上下水処理場や

つ張ったのが久松氏の次男、故・忠英氏だ。忠英氏の次女の山田社長は、銀行勤務などを経て2005年に入社。サポーターとして父が肺がんを患ったことで、後を託されて11年からトップを担っている。

2000年代には、自動車メーカー向けに、あらゆる気象条件を再現できる風洞実験設備の設計・製造も進めてきた。新車を開発する際、ボディーや塗装の耐久性を確かめるために用いられている。これまでは工場やビルなどの鉄骨工事も担い、鉄を曲げる技術を生かした県総合運動公園陸上競技場(富山市南中田)・メインスタンドの屋根や、東京スカイツリー(東京都墨田区)のメンテナンス用通路も作ってきた。現在はプラント関連設備の製作・施工は手掛けている。

山田工業は鉄やステンレス、特殊鋼などを扱う。設計や加工、塗装を行い、化学フロントや発電所で使われる圧力容器やタンク、熱交換機などを製造している。防れた日に並んでいたのは、火力発電所で用いる直径1・5m、高さ2・2mの灰輸送器。大型トラックで運ぶことのできる限界は長さ20m、直径3・5mだが、これまでは直径9・6mのタンクを製造し、現場で組み立てた経験もあるという。

高い溶接・加工技術に加え、現場での設置工事やメンテナンスを確保している。完成度が高くなっている。富山市婦中町萩島

ごみ焼却施設といった環境系プラントに納めるため、自動除塵機や汚泥のベルトプレス式脱水機、砂ろ過器、回転炉などの製造を進めた。圧力容器や産業機械設備分野などで品質管理の国際規格「ISO9001」を取得し、品質保証体制も整えて差別化を図った。

90年に3代目社長に就き、時代のニーズに合わせた事業拡大を引

**塗装前に確認**  
完成した灰輸送器の塗装前に、サイズを確認する社員  
=山田工業本社・工場  
(写真部・金田哲也)

昨年8月には創業から80年の節目を迎えた。山田社長は「激動の昭和、そして平成の時代を駆け抜けてきた。急速に変化するだろう令和の時代にも、エンジニア集団として社会に役立ってきたい」と話している。(経済部・楠浩介)

関連土曜に掲載します